

かかりつけ医としての新型コロナ診療 —病状把握システム“DUU-SYS”の紹介

〔発表者〕堂垂 伸治 (内科・医師)
どうたれ内科診療所

2020年1月からの新型コロナウイルス感染症は、現在感染者数2000万人、死者数4.2万人で今も増え続けている。膨大な「自宅療養者」と自宅死も出ている。私はこの間感染者の病状把握システムである“DUU-SYS”を開発・実践してきた。その実績と有効性を報告したい。

当院では、20年夏からコロナ患者さんが来院された。当初は疑い患者さんを病院に紹介していたが21年夏からは抗原検査による発熱外来を行ってきた。22年オミクロン株が流行すると当院でも多数の患者さんが受診された。通常外来の入り口と発熱外来の入り口を別にし、動線を分けている。また他の通用口の前に車を停めてドライブスルー形式でも診察してきた。

感染流行のたびに、「保健所や医療が逼迫する」、「検査難民が続出する」、「自宅療養者が増えた」、「クラスターが出現した」という状況が繰り返されてきた。

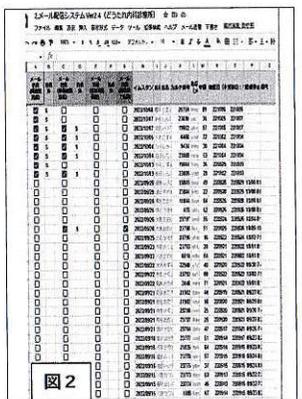
長らくコロナと対応の手遅れに誰もが苛立っている。そこで「かかりつけ医」制度はダメだ、英国の「家庭医〜登録医制度が良い」などという議論が医療関係者からも出ている始末である。

当初から患者さんの管理は保健所中心に行われてきた。しかし保健所の業務は、地域でのマクロな保健管理・パブリックヘルスを担うことで、そもそも個人の健康管理には限界がある。実際My HER-SYSによる「健康観察」画面を医療機関が見ても陽性者の病状を把握しづらく、これを保健所職員が「スコアによる観察」をしても病状把握は不可能なのではないか。

私は「医療現場になるべく負担をかけず患者さんを守る」という考えで、IT技術ボランティアとDUU-SYSを共同開発・作成してきた。

以下、「コロナ感染者（遠隔）病状把握システム」であるDUU-SYSについて説明する。

- ① Googleマイドライブから共有アイテムを開く。そして共有アイテムのDUU-SYSを開く。DUU-SYSは5枚のファイルからできている。



- ② 第1に、初診時に陽性者に渡すDUU-SYS登録依頼の用紙である (図1)。その場で用紙のQRコードを読み取ってもらう、または持ち帰り自宅からメールしてもらう。

- ③ 第2は、QRコードで読み取ったスマホに現れる「患者情報」登録画面である。これでDUU-SYSに登録してもらう。
- ④ 入力された患者情報は自動的に第3の「メール配信システム」(図2)に自動的に転記・掲載される。(図2)は登録された患者さんの名前・アドレス等の一覧表である。そして、左の各欄にチェックして「メール送信」すれば各患者に「質問票」などを一斉配信できる。
- ⑤ 第4は、患者さんの病状を問う「質問票」である。観察期間中(約10日間)に毎朝配信し、これが患者さんに届き回答してもらう。質問内容は患者さんが回答しやすいようにシンプルに工夫している。
- ⑥ 「質問票」の回答結果は、第5の「スプレッドシート」一覧表(図3)にやはり自動的に掲載される。この表を見れば、体温、症状、重症の症状、酸素飽和度や訴え等が一目でわかる。

毎朝の作業は、まず「スプレッドシート」を見て回答者の病状を把握する。そして、「メール配信システム」回答者の病状に合わせ、「様子をみます」や「心配なので電話連絡します」、「心配ないので連絡を終了します」を選択する。そして最後に当日の質問票配布欄をクリックし一斉配信する。

つまり、DUU-SYSにより患者さんの病状を日々の確に把握し不安感に対処できる。なお、1日の配信数は通常は100人まで、最大500人まで配信可能である。日々の患者さん管理は単純作業の繰り返しで、かつ短時間で済む。医療機関側の負担は少ない。「スプレッドシート」の回答一覧はエクセル表示も可能なので、個人の病状経過や統計処理も可能である。

第6波の22年1〜4月のDUU-SYS利用者に対してアンケート調査を行った。

- ① 保健所の健康観察システムであるMy HER-SYSは75%の方が利用したが、7割の方が不満を感じ評価は低いものだった。
- ② 他方、DUU-SYSには9割の方が「安心できた」、「助かった」など極めて高い評価だった。

図4は、今年の当院発熱外来、第6波と第7波の実績である。陽性者は672人、実検査の陽性率は64%で、その陽性者のうち542人、81%の方がDUU-SYSに登録された。

期間中、DUU-SYSが特に有効だった事例がある。在宅酸素を受けていた99歳施設入所の方で、施設看護師と毎日やり取りし訪問診療も行い適切に救命できた。

コロナ診療で想定される医療内容を考えてみると、DUU-SYSでは症状の問診、体温、酸素飽和度、特に困難点等を把握できる。往診も組み合わせると入院に準ずる対応もできる。さらに、DUU-SYSにより臨床医は新型コロナの病状を学べるという副次的な効能もある。

コロナ禍は今後も第8波やインフルエンザとのツインデミックも考えられる。また、コロナ禍は今後も続き毎年1万人程度の死者が出るとの予測もある。DUU-SYSは自宅療養者をトリアージできる有効なツールである。DUU-SYSは、「共有」機能があるので、病院や保健所など多くの施設間での情報共有も可能である。これまで築き上げてきた「地域包括ケア」と結びつき地域で患者さんを支えることが可能になる。そしてDUU-SYSは全て無料で導入可能で、アドレス交換と短時間のZOOM会談で操作可能になる。導入ご希望の方は「千葉県保険医協会」chiba-hok@doc-net.or.jpまで是非とも連絡して頂きたい。DUU-SYS紹介のユーチューブ(QRコード参照)もあり、「DUU-SYS」で検索も可能である。

